

## 豊かで幸せな人生100年時代を目指して:シングルマザーと貧困の分析

人生100年時代とは、単に100年を生き延びればよいわけではない。せつかくなら、豊かで、幸せな100年であってほしい——誰でもこう願うはずだ。では、人びとは現実には、どれくらい豊かな生活を送り、幸せを感じているのだろうか。ここではとくに、厳しい状況が伴いがちなシングルマザーや貧困層に着目して、本調査データを分析してみよう(この項のみ、分析にあたり成蹊大学の伊藤慈晃氏、瞿甜氏に協力してもらいました。記して感謝します)。

シングルマザー(本調査で集計対象としたの)は、どれくらいいたのか。449人いた。そのうち20代でシングルマザーとなったのは141人、30代でなったのは210人、40代でなったのは98人であった(詳細はp.106)。

その結果、女性のうち貧困層は13.6%、準貧困層は40.5%、中央値以上層は45.9%いた。男性のうちだと、貧困層12.0%、準貧困層34.1%、中央値以上層53.9%だった。したがって、貧困率は女性13.6%、男性12.0%となる(貧困の厳密な定義はp.123)。

幸せは、現在の幸福度について、0とても不幸から10とても幸せまで11段階で質問した。その結果、0とても不幸～4をまとめて「不幸」な人とする、女性のうち20.3%、男性のうち24.3%いた。5中間は女性27.2%、男性31.7%だった。6～10とても幸せをまとめて「幸せな人」とし、その割合を「幸福率」と呼ぼう。女性52.6%、男性44.0%だった(詳細はp.95)。

### 1. シングルマザーの分析:高学歴タイプの発見

シングルマザーは、低学歴で若い人たちだ——シングルマザーについての一般的な理解は、このようなものかもしれない。では、ほんとうにそうなのだろうか。それとも、これはステレオタイプであり、実際にはもっと多様なのだろうか。

シングルマザーになった年代で最終学歴を比較すると、20代でなったグループでは(短大、高専、大学、大学院卒をあわせた高学歴者が)26.3%いた。これが、30代だと38.1%、40代だと43.9%へと、1.67倍に増える(p.107)。ただし、(第3章にないが)シングルマザー以外の女性では、50%を超える。

学校卒業後の最初の仕事を比較すると、20代でなったグループだと正規雇用が60.7%いた。これが30代72.2%、40代75.5%へと、1.24倍に増える(p.107)。(第3章にないが)40代グループは、シングルマザー以外の女性より正規雇用者が多かった。

現在の仕事ではどうか。20代でなったグループでは正規雇用が31.9%、30代29.5%、40代31.6%へと大きな違いはない(p.108)。(第3章にないが)シングルマザー以外の女性では4割ほどが正規雇用者である。

シングルマザーの平均年齢は51.7歳だった。(第3章にないが)20代でシングルマザーとなった人たちは、平均すると21.9歳で最初の結婚(初婚)をし、22.8歳で最初の子(第一子)をもち、25.8歳で離婚し、(再婚した人は)30.7歳で再婚した。シングルマザー以外の女性だと、平均して初婚26.8歳、第一子28.1歳のあと(離婚する人は)34.1歳で離婚し、35.8歳で再婚するので、たしかにそれと比べると早い。しかし、40代でシングルマザーとなった人たちは、26.8歳で最初に結婚し、29.1歳で第一子をもち、43.3歳で離婚し(再婚した人は)42.0歳で再婚していた。そのため、シングルマザー以外の女性と同じくらいか、むしろ遅かった。

このように、シングルマザーといっても一括りにはできない。むしろ、多様な人びとがいることが、本調査データから明らかとなった。

特徴を強調するなら、タイプAは相対的に低学歴で、最初に正規雇用の仕事に就けず、20代でシングルマザーとなる。結婚、出産、離婚、再婚が20代から30歳までで一周し、レコードの早回しのように早い。このタイプAは、シングルマザーの一般的なイメージに近いといえよう。

一方、タイプBは、より高学歴で(タイプAの1.67倍)、シングルマザー以外の女性と同レベルで最初に正規雇用の仕事に就き(タイプAの1.24倍)、40代でシングルマザーとなる。結婚、出産は20代だが、離婚、再婚は40代で起こるため、シングルマザー以外の女性と同じかむしろ遅い。30代でシングルマザーとなる人たちは、タイプAとBの間に位置する。

参考まで、筆者がインタビューしたあるシングルマザーは、大学卒業後、正規雇用の仕事に就いた。結婚して退職し、出産後に30代でシングルマザーとなる。現在は40代で、非正規の仕事に就き、収入面で貧困層と準貧困層の境目にいる。40代でシングルマザーとなるタイプBのライフコースに、近いだろう。「忙しいと、子どもに食事をつくったり、かまったりできない」のが残念だという。

高学歴なタイプBは、本調査データによっていわば「発見」されたといえよう。タイプBの存在は、これまでタイプAの影に隠れて見おとされてきた。しかし、この先タイプBが増え、シングルマザーがますます多様化する可能性がないとはいえない(むしろその可能性は高い)。そのため、今後はタイプBの存在も前提として、人生100年時代の未来を構想する必要があるだろう。

## 2. 貧困の分析:シングルマザー、20代、60代の危険

どのような人たちが、貧困に苦しみ、豊かな生活を送れないのか。

男女で比べると、女性の貧困率は13.6%、男性は12.0%と、やや女性が高く、準貧困層も多い。さらに年代に分けると、女性では40代で貧困率が最も低く11.2%であった(中央値以上層が最も多く豊かなのは50代)。男性では50代の9.4%が最も低い(中央値以上層も最多(p.123))。どちらも、仕事、家族が安定するようになるためであろう。

最も貧困率が高くなるのは、女性だと20代の19.6%で(準貧困層が最多は60代)、これは最も低い40代の1.75倍となる。男性では、やはり20代で最多の21.5%となり(準貧困層が最多は60代)、最も低い50代の2.29倍となった(p.123)。若いため、本人の収入が少なく、さらに結婚などによる家族からのサポートが得られにくいためかもしれない。

シングルマザーではどうか。シングルマザー以外の女性では貧困率12.8%なのに対し、シングルマザー全体で29.6%と大きく増える(2.31倍)。内訳は、20代でシングルマザーとなったグループだと貧困率32.7%、30代30.5%、40代23.4%と、徐々に減る(p.124)(それぞれシングルマザー以外の2.55倍、2.38倍、1.83倍)。

このように、貧困層は男女ともに20代で多く、準貧困層は60代が多かった(最大で女性1.75倍、男性2.29倍貧困率が高い)。シングルマザーでは、シングルマザー以外の女性と比べて、2.31倍貧困率が高かった。

参考まで、内閣府「令和3年子供の生活状況調査の分析報告書」によれば、全国の中学2年生の子とその保護者をランダムサンプリング調査した結果、シングルマザーのうち54.4%が貧困層、35.2%が準貧困層で、中央値以上はわずか10.3%であった(n=281、図2-1-1-3より)。その結果、過去1年の間にお金がなくて必要な食料を買えなかった世帯がシングルマザーのうち32.1%、衣服が買えなかった世帯が41.0%いた(ふたり親世帯ではそれぞれ8.5%、13.1%、図2-1-1-13、図2-1-1-16より)。

貧困の問題は、表に現れにくいと、ややもすれば見すごされかねない。とはいえ、世代間やシングルマザーとそれ以外で貧困率に倍ほどの差があるため、放置してよいはずがない。

## 3. 幸福の分析:シングルマザー、貧困層、未婚者への支援の必要性

シングルマザーや貧困といった厳しい状況は、幸福度にどう影響するのか。

シングルマザー以外の女性では幸福率53.1%に対し、シングルマザーでは41.0%へと幸せな人が減った(0.77倍)。内訳は、20代でシングルマザーとなったグループは39.7%、30代39.5%、40代45.9%であった(シングルマザー以外の0.75倍、0.74倍、0.86倍)。20代と30代では幸福率に違いはないが、(4以下の)不幸な人の割合が20代でなったグループは24.1%なのに対し、30代だと31.9%へと増える(p.126)。

貧困層はどうか。女性だと、幸福率が中央値以上層のうち64.2%なのが、準貧困層52.7%、貧困層36.8%へと低下する(中央値以上層の0.82倍、0.57倍)。男性でも同様に、中央値以上層52.8%が、準貧困層43.6%、貧困層28.9%へと減った(0.83倍、0.55倍)(p.125)。シングルマザーでもたしかに幸せな人が減るが(最大0.74倍)、貧困層のほうがさらに減少させることが分かった(最大0.55倍)。

なお、(第2章、第3章にないが)婚姻状態別だと、男女ともに既婚者に最も幸福な人が多く(女性61.8%、男性54.6%)、死別して現在未婚者(50.5%、40.0%)、離別して現在未婚者(41.2%、28.6%)へと続く。幸福な人がもっとも少ないのは、男女とも結婚経験のない未婚者(33.6%、28.1%)であった(女性で既婚者の0.54倍、男性では0.51倍)。

このように、シングルマザー、貧困層、未婚者で幸福度が低下した。減り幅が大きかったのは、貧困層と未婚者である(幸せな人の割合が中央値以上層、既婚者の約半分)。

すべての人が、豊かで幸せな人生100年時代のチャンスを受けとれる——そのためには、本調査データの分析から、とくにシングルマザー、貧困層、未婚者に寄り添った支援が不可欠だといえそうである。